

コラム

大学祭の意義

一〇月下旬から一月にかけて、各大学とも学園祭のシーズンである。各部・サークル企画を告知した立看板が並び、ポスター・ビラなどが学内に貼られている。準備や後片付けも含めて開催期間中は授業も休講となり、大学挙げての年に一度のイベントとなっている。しかし、その学園祭が大学にとって有意義なものかと問うと、難しいところだ。毎年、似たような企画が繰り返される（バンド演奏、著名人を呼んでの講演会、ミスコン：）。各部・サークルは小ぢんまりと与えられたスペースで地味な活動をしている。外の通路の両脇には出店が立ち並び、お客さんに必死に声をかける。その看板には、たこ焼き、お好み焼き、焼きそば、焼き鳥、チョコバナナ：。学内が緑日と化す数日である。

本来学園祭には、目頃の研究や教育の成果を社会に公開する目的があったはずである。今でも目頃の研究やゼミ活動の成果を発表する大学（東大の五月祭や慶応の三田祭等）もあるが、それらは少数派で多くは模擬店とイベント中心の学園祭になっている。

大学が授業を休講してまで、マンネリ化した企画と露店販売を行う必要があるのかと考えてしまう。もちろん、模擬店は飲食を共にするという「祭り」には欠かせない要素であるし、学園祭を成功させるために熱心な学生たちがいることは認める。しかし、すべての学生が参加するわけでもない。部・サークル活動をしていない学生などは、大学に来ることなく、別のことにいそむ期間となつてもいる。大学が現在のような学園祭を学内行事と位置づける意味はあるのだろうか。そして、その期間となつてもいる。大学が「祭り」には集団の結束を高める効果がある。集団維持に必要な通過儀礼である。「祭り」という普段にはない世界を集団員たちが共有することによって、更に自分たちが所属する集団への帰属意識・愛着が強まっていくというものだ。

確かに学園祭に参加した同じ部・サークルメンバー内部の結束は強まる。互いに非日常的世界を通過したという経験は大きい。しかし、グループ間の関係、大学への帰属意識が、そう劇的に高まることはない。おそらく、大学全体の「祭り」という感覚が薄いからだ。

小集団が独立した「鳥宇宙」と化し、これらを包む「大きな宇宙（＝大学）」の存在が学生たちに忘れられている。今こそ、学園祭を「大きな宇宙」に自分たちが所属していることを強く学生たちに意識させる機会にすべきではないか。そのためにも従来のマンネリ化した企画にはない、別の方向性が求められているように感じるのは私だけであろうか。露店の食べ物にはもう飽きた。

（浜島幸司）